

指導資料



鹿児島県総合教育センター

特別支援教育 第132号

- 小, 中, 盲・聾・養護学校対象 -

平成15年11月発行

個別の指導計画における評価の在り方

盲・聾・養護学校学習指導要領で、自立活動及び重複障害者の指導に、個別の指導計画の作成が位置付けられている。それを受けて盲・聾・養護学校や特殊学級等においては、具体的な作成と実践が進められている。

各学校では、自立活動及び重複障害者以外の領域や児童生徒についても、多面的な実態把握、的確な指導目標の設定、効果的な実践がなされ、個に応じた指導の充実が図られている。しかし、適切な理解に基づく指導と評価の一体化を図る学習指導の評価については、まだ取組が始まったばかりの状況である。

そこで、本稿では個別の指導計画における評価について基本的な考え方を整理し、より一層細やかな手だてや指導の手掛かりが得られるような評価の進め方について述べる。

1 評価の基本的な考え方

評価とは、児童生徒一人一人のよりよい成長・発達を目指して行うものである。評価については、学習指導要領にも示されているとおり、児童生徒のよい点や進歩の状況などを積極的・肯定的に評価することが大切である。その際、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い、学習意欲の向上に生かすようにすることが重要である。

つまり、児童生徒の実態の整理の仕方、目標や指導内容・方法の設定、教材・教具の選定、児童生徒とのかかわりの在り方など、発展的な手だてや教師の専門性を深める手掛かりを得るためにも、指導法改善につながる観点を明確にした評価を行うことが大切である。

特に、障害のある児童生徒の教育においては、適切な理解に基づく指導と評価の一体化を図ることがより重要となる。また、個別の指導計画においては、教師間や保護者と指導の成果を共有できる利点もあり、多面的・客観的な評価の工夫が望まれる。

2 個別の指導計画における評価の位置付け

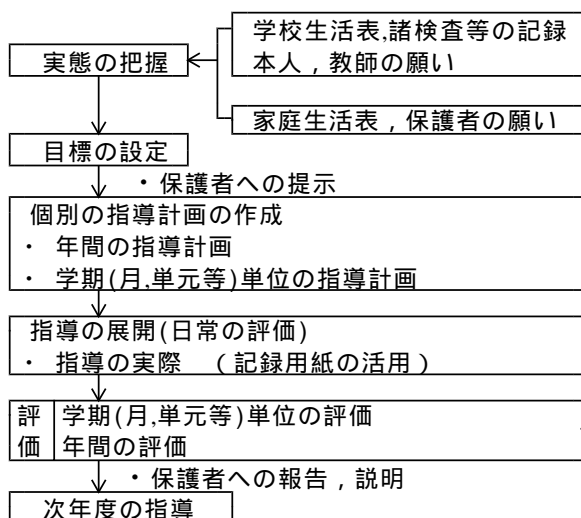


図1 個別の指導計画における評価の位置付け

個別の指導計画の中での評価の位置付けは、おおまかには図1のようになる。この基本的なプロセスを踏まえて評価を行い、教師間の情報交換はもちろんのこと、保護者等とも情報を共有しながら柔軟な指導の継続・改善を重ねていきたい。

3 指導と評価の一体化に向けて

日々の実践において、指導と評価の一体化を図る学習指導を展開するために、以下のような点に留意する。

(1) 明確な指導目標の設定

目標が具体的であればあるほど評価しやすく、目標そのものの妥当性も評価できる。設定に当たり、「いつ」、「だれと」、「どの場面で」、「どのような支援を受けて」、「何が」、「どの程度」できるかを明確にする。

(2) 日々の学習活動の個別化・具体化

その児童生徒なりの学習活動を明確にするだけでなく、指導方法についても明確にする。例えば、教材・教具の有効性や教師の働き掛けの妥当性などの手だての検証は重要である。

(3) 指導の成果の情報蓄積の重要性

総括的評価は、指導期間や単元等の区切りで行うが、その間の情報を蓄積しておくことで客観的な評価が可能になる。日々の指導の成果をこまめに記録し、それを指導に生かしていく。このように、日々の評価を蓄積することでねらいとする活動ができるのである。

(4) 教師間や保護者との連携による評価

指導に当たる教師の評価だけでなく、

その児童生徒にかかわる複数の教師や保護者の協力を得ながら、客観性のある情報の収集に努める。目標の達成状況や指導の改善などについて多面的に意見を出し合い、よりよい指導の方向性を導き出せるように連携を強める。

4 評価の実際

個別の指導計画における評価は、大きく次の二つの観点から考えることが重要である。一つは児童生徒の成長・発達を明確にするといった観点である。児童生徒の目標実現といった視点に立ち、いわゆる個人内評価を行う必要がある。もう一つは、計画の妥当性という観点である。指導者側の立場で、目標の妥当性と手だての適切さを評価し、指導の改善につなげるための評価である。以下、この二つの観点に沿って、その実際を具体的に述べる。

(1) 児童生徒の学習の評価

学習の評価については、目標に沿った表面的、量的な変化だけではなく、内容的、質的な面にも視点を当て、目標達成の度合いをとらえていくようにする。

また、複数での評価が基本となるため、教師間で共通認識できる規準が必要である。この評価規準をできるだけ客観性のあるものとし、評価者によるばらつきができるだけ出ないように、事前に協議を行うことが大切である。

目標によって、評価の際の記述の方法は異なるが、表1に示すように、何が、どの程度できるようになったのかを具体的に記述する。

表1 目標の違いと評価の記述例

目標	記述例
情意面	・ に意欲的に取り組めた。 ・ に大きな伸びがみられた。
行動・技能の獲得	・ が補助なしでできた。 ・ は確実だが、 は不確実。
行動・技能の定着	・ が回、分でできた。 ・ 指示がなくても ができた。
行動上の問題の改善	・ が大きく改善した。 ・ が軽減した。(消失した。)
知識・理解	・ が確実に発表できた。 ・ 回中 回は正解した。

(2) 計画の妥当性

学習の評価では、具体的な事実が述べられるが、ここでは同時に学校や教師が進める教育自体の評価として、なぜそのような結果になったのかという考察が行われる。

その視点として、

- ・ 目標は、実際的で現実的であったか
- ・ 目標は、児童生徒の今とこれからの生活を充実し、豊かにするものであったか
- ・ 手だてを講じやすい目標であったか
- ・ 連携や協力がしやすい目標や方法であったか

といった項目が考えられる。表2はその記述例である。

表2 計画の妥当性についての記述例

視点	記述例
目標の妥当性	・ の目標は難しすぎた。 ・ については、より細かいステップに分ける必要がある。
生活の充実と豊かさ	・ の目標よりは について必要性を感じる。 ・ は に好影響を与えた。
指導の手だての適切さ	・ の方法は効果があったが、 は効果がなかった。 ・ は に有効であった。
連携や協力	・ は、 と連携を取りやすく向上がみられた。 ・ は の協力が得られた。

以上の(1)、(2)の評価に当たっては、保護者との連携も忘れてはならない。指導を進めながら、連絡帳等でこまめに情報を交換し合うことで、必要に応じて目標や手だての部分修正を行う。また、学期末、年度末等には、家庭等での生活の充実が図られたか、保護者の対応はどうであったか等、検討し合う場を設定する。

5 評価例

(1) 学習の評価例

A養護学校では、まず、総合的な個人目標を設定し、それを踏まえた形で、指導の形態ごとに年間目標、学期目標を掲げ、それぞれ評価に当たっている。その実際を表3に示す。

表3 学習の評価例

	年間目標	1 学期		2
		1	2	
日常生活	A 簡単な約束事を守って集団で行動をしたり、自分の係の仕事をしたりすることができる。 B 自分から着替えに取り掛かり、身なりを整えることができる。	A 絵カード等で約束を理解し、行動の見通しがもてるようになり、集団で行動する時間が長くなった。係の仕事は教師の介助が必要である。 B 教師の言葉掛けを理解し、意識が自分の身なりに向くようになる。ズボンに介助なしで着替えることができるようになった。		
		活	学 期	a 学習時間と休み時間を区別して、学習に参加したり遊んだりすることができる。 b 教師の言葉掛けで着替えを始め、シャツのボタンを自分で半分以上はめることができる。
指導	a 一日の中で、半分程度は自分から教室に戻ることができるようになった。給食時間に教室を離れることが確実になくなった。絵カードでスケジュールを示したことが効果的であった。 b 自分で更衣室に行くことが習慣化した。下から4番目のボタンまでは、はめることができた。	指	導	a b
		国	語	A 平仮名や片仮名で書かれた文章を読んだり視写したりすることができる。 B 簡単な絵本を基に、動作化することができ

さらに、A養護学校では、表4のような簡易な記録表を作成している。常に年間目標や学期目標との関連を図りながら日常の指導の結果を蓄積している。






表4 短期目標に基づく日々の記録例

短期目標	b 教師の言葉掛けで着替えを始め、シャツのボタンを自分で半分以上はめることができる。		
指導期間	平成 年4月18日～平成 年6月15日 授業時数； 時間		
指導の形態	日常生活の指導の時間 個別指導(担当 ,)		
記録項目	登校して着替えに移行するまでの状態	ボタン掛けの状態(意欲面, 技術面)	
4 18 金	・ 自分から更衣場所に行かない。	・ 手を添えるとはめようとする。	・
4 21 月	・ 教師が手を取って誘導する。	・ 一番下のボタンに手をもっていく。	・
4 22 火	・ 教師の声掛けに反応がある。	・ 友達がするのを模倣しようとする。	・

(2) 計画の妥当性についての評価表例

B養護学校では、指導法改善の立場から個別の指導計画の妥当性について、表5のような評価表を作成し、学期末や年度末に評価を実施している。

表5 年間計画の評価表例

評価項目	評価	今後の課題
実態把握は的確であったか	+	・ 基本的な生活習慣もっと細かく分析す
長期目標は妥当であったか	+	・ 1年間では定着が来年度に向けた目標
学習期間は適当であったか	+	・ 2学期について欲短い期間の中で指導
指導の形態は適切であったか	+	・ 生活単元学習の方更に多面的なアプロ
指導体制は適切であったか	    	・ 学校全体での取組いい状態で進めるこ
評価は適切に行われたか	+	・ 毎日の記録に基づ客観的な評価はこれ
校内での連携や協力はあったか	+	・ 管理職の協力を得生徒指導係にも時を
保護者との連携は図られたか	+	・ 連絡帳でこまめに協力をもらいながら

それぞれの項目による評価は、複数の教師が参加し、より客観性の高い評価になるように工夫されている。B養護学校では、これらの評価結果を基にして明らかになった課題を、定期的な事例研究会等で積極的に検討して共通理解を図っている。そして、それらの検討結果を集約し、よりよい教育課程の編成につなげている。(図2参照)

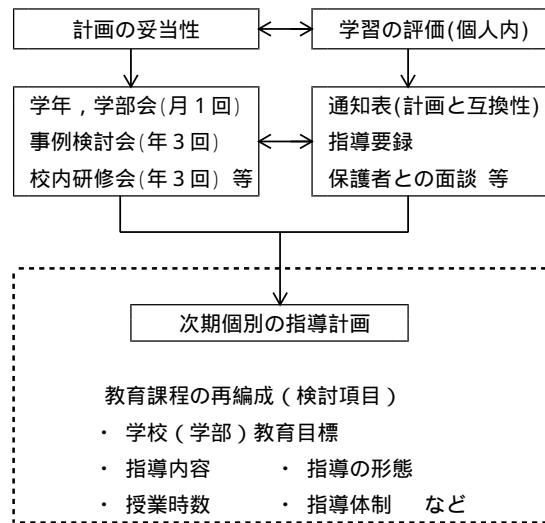


図2 評価から教育課程の再編成への流れ

このように、各学校や学級で、評価に関するシステムを構築し、手順を明確にすることで、児童生徒をよりとらえやすくなる。また、そのシステムが機能するためには、最終的に一人一人の教師の観察力や洞察力が求められる。常に、児童生徒を生かす、伸ばす視点から児童生徒を見つめ評価を行い、指導法を改善し、具体的な問題を一つ一つ解決していく姿勢をもちたい。

【参考文献】

川住隆一『個別の指導計画の評価』2002 特別支援教育 6 (特殊教育研修室)